NIKKEN
EXPERIENCE, INTEGRATED

150人のボランティアを生んだ設計プロセス

常滑市民病院(愛知県)は、市民や病院職員を巻き込んだ設計プロセスにより、１５０人ものボランティアに支えられ愛される病院に生まれ変わりました。

常滑市民病院エントランス。緑のエプロンの市民ボランティアの皆さんが支えている

市民に愛され持続可能な病院に再生

常滑市民病院は、移転・新築により2015年に開院しました。

老朽化した旧病院(1959年開院)は、地域にとって、また感染症や空港災害対応を行う中部国際空港の直近病院として、必要性の高い施設でありながら、赤字の経常化が原因で市民から理解を得られず、2度にわたって新築構想が中止となっていました。

ところが、3度目の正直で誕生した現在の常滑市民病院は、150人ものボランティアの皆さんが、その活動の一端を担うほど、愛される病院に生まれ変わりました。

その背景には、新病院建設の基本理念「コミュニケーション日本一の病院」にふさわしく、市民や病院職員を巻き込んだ設計プロセスがありました。

みんなで創ろう！！新・常滑市民病院100人会議

市民や病院職員を巻き込むプロセスは、日建設計が2012年に設計者に選ばれる以前の2011年から始まりました。

山田朝夫副市長の発案により、将来にわたり、全市民が「本当にあってよかった」「私たちが支えていこう」と思える病院をつくりたい。そのために、市民や病院職員が本音で話し合う「みんなで創ろう！！新・常滑市民病院100人会議(以下、100人会議)」が設置されました。5回にわたる100人会議の議論は、「新・常滑市民病院基本構想」に反映されています。

市民を継続的に巻き込む設計プロセス

①ワークショップ

日建設計は、こうしてつくられた新病院建設に対する空気と100人会議の要請を受けて、2012年8月より全6回にわたって、一部の100人会議メンバーと病院職員約30名によるワークショップを開催し、設計に反映していきました。設計案を描いたA１サイズの図面を広げ、それに対して、参加者が意見を出し合うという進め方です。意見・要望に関しては、反映できるもの、できないものを見極めながら、コストアップにつながらないよう工事全体でバランスをとるなどの対応策をとり、丁寧に説明していくプロセスを重視しました。

②エントランスホール壁画のデザインと制作

病院の顔であるエントランスホールのタイル壁画は、デザインを市民から公募しました。高校生の案が選ばれ、制作にあたっては、地元の中高生や病院職員2,192人が参加したタイルワークショップが開催されました。

市民や病院職員を継続的に巻き込み、それぞれの立場や専門性を尊重しながら、建設事業を進めることで、「自分たちの病院」という意識が生まれ、そして、その意識が、地域医療の継続性を後押しする結果となっています。

プロジェクト名称:常滑市民病院　　建築主:愛知県常滑市
竣工年:2015年
受賞歴:2019年カーボンニュートラル賞